

校長先生の初恋物語

第62話 きのこ君の思いよ ジャイアンに届け

きのこ君は、ジャイアンの手を振り払いました。そんなの見たことはありません。いつもは、ジャイアンの言うがままのきのこ君なんです。ジャイアンは、びっくりしていました。



きのこ君が言いました。「ジャイアンにはかんしゃしてるよ。なんだかんだ言って、いつもぼくを守ってくれてる。リレーだって、ぼく1人の責任にならないように、本気出してないんでしょ。そんなのもういいよ。ぼくを守らなくてもいいよ。ジャイアンは、本当は走るのが速いでしょ。だったら、本気で走ってよ。一緒に勝とうって思ってよ。一緒に、秘密練習しようよ。」ジャイアンは、きのこ君の迫力にたじたじになっていました。いつもだったら、自分に逆らったりしないきのこ君に、びっくりしていました。そして、びっくりした顔のまま、一人で、どこかに行ってしまうました。

とっくんは、きのこ君のその言葉に感激しました。

「きのこ君、すごいよ。よく言ったね。」言ったあとのきのこ君は、いつもの弱々して感じてでしたが、とっくんはきのこ君の本当の姿を見た気がしました。

「きっと、秘密練習に、ジャイアンも来てくれるさ。」

朝の秘密練習が始まりました。メンバーは、とっくん、きのこ君、ちん君です。朝の6時30分にマンモス小学校に



集まって、運動場を走りました。ジャイアンは、来てくれませんでした。きのこ君のおもいが、届かなかったみたいです。それは仕方ないことです。集まった3人で、毎日毎日走り続けました。

3人が走っているといううわさが、クラスみんなに広がっていきました。すると、その秘密練習の仲間がだんだん増えていきました。



アマーラさんが来ました。ダンプさんが来ました。よしこさんも来ました。コージ君も来ました。他の友達も、いつの間にかとっくんたちと走っていました。

一番最後の方に来たのは、きんに君と足長君でした。2人は、おこっていました。

「どうしてぼくたちにはないしよで、やってるんだ。さみしいだろ。」

ちゃんととっくんが説明しました。いつもリレー大会では活躍してくれる2人には、秘密にしたかったんだと。2人に対して、恩返しの意味もあるんだと。2人はすぐに納得し、そして一緒に練習するのかと思ったら、そうではなくて、2人が走り方の鬼コーチになりました。ちんたら走っていると、2人がおこります。

「こらー。とっくん。ちんたら走るなー。」

「こらー。ダンパー。もっとやせろー。」

と、普段ダンプさんに言えないようなことまで言っていました。秘密練習は続きました。ジャイアンだけが、一度も練習には来ませんでした。それ以外のみんなは、毎日練習をしました。そしてついに、7月のリレー大会の日になりました。6年2組、ミッタのクラスに、すごい奇跡がやってきます。



つづく

次回予告 7月のリレー大会

どこかに、かたつむりが5ひきいるよ
さがしてね。